



大塚甲山

大塚甲山について

小山内 時雄

はしがき

大塚甲山は、今から四十四年前の明治四十四年六月七日、青森県上北郡浦野館村大字上野（うわの）七拾番地壱号の生家で、三十二年の短い一生を閉じた不幸な詩人である。

岩野泡鳴の「新体詩史」を見ると、明治三十六年のところに、「明星に高田梨雨、大塚甲山の作が出た」とあり、三十八年のところにも新小説に甲山が居たと書きとめられてある。河井醉茗の「文庫」の歴史を書いたものにも俳人としての甲山の名が見える。

また後藤宙外の「明治文壇回顧」に甲山のことが触れてあり、それが唯一の甲山を知る資料であったが、郷里七戸町の戸館宰氏が最近甲山をとりあげてから、評論家小説家中野重治氏が、「大塚甲山の墓」なる一文を「新日本文学」（昭和三十年八月九月）に草して、中央に紹介し、筆者もまた「図書新聞」に（昭和三十年十一月）に紹介した。同年十二月には、戸館氏が「埋れた詩人」と副題して「大塚甲山作品抄」を編んだところから、その著作の刊行を見なかつたため忘れ去られた詩人甲山が少しく世の人の知るところとなったが、いまだ学界への紹介がないまゝ、一文を草

したものである。拙文によって大塚甲山の一端を知って頂けば幸である。

一

大塚甲山は、明治十三年（一八八〇年）一月一日、青森県上北郡上野（うわの）村字手長九番戸一号（現在浦野館村大字上野七十番地一号）に生まれた。甲山は、その号、又むつの山人、むつの人、ことぶきと云った。彼は自己の出生について、『自伝材料』中の「パンと水の日記」および「父の青年時代」で触れている。それによると、前年の旧暦十月二十五日が本当の生年月日で、父が計算の便を計って届は一月一日としたのであるという。彼が実際に生まれた旧十月二十五日は、菅原道真の祭りの日に当たっていて、父の教子たちが彼の家に集って来たが、常は甲斐／＼しく接待する母は、この日に限って心地常のごとくでないので、闇に引隠っていた。その晩方近く彼は誕生したのであるという。そこは、父が月給一円五十銭とかで先生をしていた上北郡第八学区公立上野簡易小学校の一隅の「実に穢い小さな家で戸がなくて縄趺を下げて居」るような処だったということを書き記している。彼は、寿助と命名された。それは彼が生まれる前、兄弟五人あったが、みな早世したために、「今度の子は長生きするように」との父母の希いが籠められてあった。父理兵衛三十六歳、母きの二十七歳の時の子である。

父方の祖先は、津田五郎左衛門延治という江州の武士であったが、安永年間に没落し、その子利兵衛、重兵衛、勘兵衛の三人は、江州商人大塚屋喜平治が南部支藩の御用商人として七戸に下る際に随伴して来て、遂に七戸に居を定めることになったものと伝えられている。其後大塚屋の大番頭となっていた利兵衛は、安永十年暖簾を分けて貰って大塚姓を名乗り、食品を商うことになった。重兵衛は、大塚屋が盛田姓を名乗った後これを継ぎ、代々旅宿を業とし現在の大重旅館はその後裔である。明治三十九年、甲山が上北郡役所に務めた時にこゝに下宿していた。また次妹ハ

ルが手伝をしていた家でもある。勘兵衛は自家の津田姓を継いで、その後裔はやはり七戸町で魚屋を業としている。甲山の家も代々七戸町にあり、同町青岩寺には祖先の墓がある。父の代になって上野の人となったのである。同部落北端の墓地は、田圃の向うに沼崎部落、東は小川原沼をのぞみ、北は七戸川が帯のように田圃の間を流れて沼に注ぎ、西、七戸の方はるかに八甲田山系の八幡嶽を望見できる眺めのよい処であるが、こゝに彼の父母や九歳で夭折した妹とよといっしよに甲山が永久の眠りにについている。

甲山の祖父は五代目理兵衛であるが、生没未詳、祖母は、なほ七戸の平民高屋敷宇野の長女、明治三十三年、七十四歳で北海道に於いて死亡、二十一歳になっていた甲山は「祖母を弔ふ」の詩一篇を詠じて、相見ざりし祖母の死を悼んだ。五代目理兵衛とは、なとの間には、三男二女が生まれた。長男佐助が即ち甲山の父であり、六代目理兵衛を襲名している。次男常八、三男定吉（常八の相続人となった）次女たけは「帰郷の記」（明治三十八年四月、新小説第十年第四号）に「北海道の箱館なる父の妹狂病を發せしがゆゑに夫に送られてこの貧しき家の寄寓人となりたるにして日夜種々の狂態を演じ四隣の家をして眠ることを得ざらしむる迄、泣き、笑い、舞い唄いしがため其（筆者註、甲山の母）心遣一方ならず、いとゞ病を（甲山の母の）を増しめしという、数ヶ月のち稍々癒えて去年の春夫の許にかへりしとはせめてもの倅というべし」と描かれた叔母とはこの人のことであろうか。父理兵衛（墓碑には理平）は、弘化元年（一八四四年）十一月に生まれ、大正八年（一九一八年）七月、七十五歳で浦野館上野に没した。母きのは大深内村洞内法蓮寺（曹洞宗）の住職佐々木氏の娘であるが、その母方の実家七戸町の松尾亥之助養三女となって、理兵衛と結婚している。二人の間には甲山の下に一男五女が生まれていて、現在、次女ゆき（明治二十年生）次男理吉（明治二十四年生）の二人が生存、夫々上野と七戸とに住まわっている。

父理兵衛はその青年時代、まだ七戸町小川町に住んでいた時分に、祖母は菓子を商っていたので、それを近隣の部

落を廻って売り歩いていたが、その売上げ金を即座に酒にかえて、部落の人を前に祭文や平曲を語り、漢詩を朗吟して聴かせ、また手紙の代読代筆を気軽にやってやるという風であったので、各部落の人々に親しまれ、人々は、彼が自分たちの部落に廻ってくるのをいつも待っていたと伝えられている。理兵衛は明治六年七月の地租改正の際には低い土地生産力に対する過高な収獲等級を決めようとした役人の不当を叫んで、不利に陥ろうとした農民を救った^①。彼の抱く正義感が、彼をして農民のために立たせたのであるといえよう。このため彼は、部落民の厚い信頼を勝ち得、やがて迎えられて、創立当初の上北郡第八学区公立上野簡易小学校の先生となり、その後同校の学務委員を務めるなどするようになったのである。^②また、明治三十年頃、現在浦野村の公有地になっている三百町歩の土地を、時の商人地主らが農民から買収しようとした時にも、土地を手放した農民の不幸不利を寢食を忘れて説得して廻り、遂にこれが阻止に成功したのであった。かくの如く、彼は常に正義を愛する人であり、私利を追う者を憎み、貧しい者、弱い者の味方であり、村民の福利のためには家業を捨てて顧みない人であった。甲山は、このような父を伝えて、

「父は実に仏人であり、奇人であった。」

「宇宙には一つの主宰の神あることを固く信じて『我のなした事は神様が見て居る』と口癖に言ふて人の毀誉褒貶には一毫も自信を動かすことが無かった。併し事実反したことを言ひ触らして名誉を傷くるものあるときは烈火のごとく怒り弁解難詰し、自己の潔白を証し其人をして叩頭謝罪せしめねばやまなかった。」（自伝材料）

といっている。甲山はこの父の血を色濃く享けついでいると思われ、また「世に少年時代の無意識の感化程驚くべき勢力を一生にをよぼすものすくなし」（『自伝材料』中「パンと水の日記」）と自ら記しているごとく、その感化を強く受け、厳しい教育も施されて成長したのであり、このことは、後年の甲山を考える時に、極めて重要な意味を持つものと考えられるのである。現在上野に雜貨店を営んでいる次女の大塚ゆき氏（七十歳）は「当時部落には店が一

軒しかなかった。だから家業に精を出して儲けようとすれば、いくらでも儲けられた。しかし父は自分のこと、自分の家のことより、村のこと、村の人々のことを先に考える人であった。」と筆者に語ってくれた。甲山は、このような父を一方では肯定し、一方では否定していたようである。「帰郷の記」（明治三八、四、『新小説』第十年第四号）は明治三十五年九月再度の上京以来四年ぶりに、一つには病臥の身の母を見舞うため、一つには自らの脳病を養うために帰郷した時の事を書いたものであるが、それには、はっきりと父を批判している。少し長いが左に引いてみよう。

我父或る時従容として我に問ふて曰く『汝四ヶ年間東京に遊び得たところは何ぞや』と、我答て曰く『得たる
ところ極めて少なし、只若し強いて言はゞ神を尊び、人を愛し、己を正うするの必要を悟れるのみ』と、父曰く
『世知りて行はざるものあり、汝夫れいかに』と。

我が父は居村の公有地を救はんがために二十余年一日のごとく尽瘁し、終に家産を失なひ、妻を病ましめ、子を教育すること能はず、己は食をも吸ふこと能ず乞食に相去る一步の状態に陥り三児を他に托して悔ゆることなき怪漢なり。一日我に曰く『兄よ、我も亦古聖賢の道的一端を行けり』我答て曰く『然り、されどそは父の道、理の道にして、我の道、情の道にあらざるなり、我は人間の第一重大なる義務は一家を肅ふにありと知る、夫れ己れの一家を貧窮に陥らしめ子を養育すること能はず、これ我よりして論すれば罪惡なり、一村の公有地を救ふべく其犠牲余りに大に過ぎたり、されど父の道を可とする人あらん、また我の論に左袒する人あらん、我は父の偉れたるを認む、されども我はこれを是認するに躊躇するものなり、これ或は我の父の子として親しく其難に当れるがゆゑにして、局外者ならば更に一層父の所為に同情を表せしやも知るべからざるなり。』と答ひたり。

（同誌「雜錄」欄二〇五頁—六頁）

このように父を批判はしているものの、青年時代の彼をして仏教、儒教に向わしめたのも、この父のいわゆる無意

識の感化を無視し得ないのである。

二

甲山は、明治十九年、上北郡第八学区公立上野小学校に入学、同二十三年、「人物学力優等の証書を受」けて修了したが、学校には出る日は少く、父のところに勉強に来る青少年に交って、父から十八史略、唐詩選（十歳）の素読をうけ、修了後の一年ばかり、上野小学校の巡回教師沼田義質に就いて習い、四書五経、日本外史などを読むことが出来た。（『自伝材料』）女子には学問が不必要とされて学校に入る者は極めて稀であり、男子の就学率もそれほど高くない時代の僻地であって、学業以外に学んだことは、父の有識からであるが、長男である彼が家業の商業をつがず、向学の心を燃立たせ、後に文筆へと走る素因をなしたものと思われる。甲山は、十三歳（明治二十五年）の時から中学生向きの「少年園」に対しても「少年園」営業部にいた高橋省三が学齢館創業の仕事はじめて出した小学校むきの雑誌「小国民」（石井研堂編集）を購読しはじめた。十五歳（明治二十七年）の時古文館発行の白銅セレーズの一編「大冒険」（山県蝨湖）を注文したが品切のため、代りに宮崎八百吉の「湖処子詩集」（明二六、一一古文館）が送られて来た。これが彼の目に触れた最初の詩集であった。が、当時まだ新体詩を解するに至らず、詩への興味も湧かなかったという。甲山は詩より先に俳句に多く興味をもった。父が以前から購読していた新聞「日本」で、当時「癩祭書屋俳話」が掲載されていたので、子規の名だけは知っていたが、その子規編集で『日本』が発行停止の間のつなぎとして発刊されることになった『小日本』を、二月十一日の創刊から七月十五日の終刊までを父から購読を許され、少年の熱情を傾けて愛読したという。同誌上において子規は俳句を募集し、新俳句を鼓吹したのであったが、甲山は、よく理解出来なかったが、それらの句には深く印象に残るものがあつた。「不知／＼の間に美の琴線に触る、

ものありて、後日の萌芽たりしは疑なし。」（『自伝材料』中の「枯野集を綴る時」なる一文）と後年回想している。そこで『少国民』へ俳句の投書となった。彼が、沼崎郵便局の通常雇員を命ぜられ、月俸八円を給された明治二十九年、十七歳の時であった。この年九月、『少年園』から『小文庫』が発刊されたが、これに雑文を投書しているが見るべきものはない。翌三十年十一月頃「小文庫」は廃刊になり、前払代の分として『文庫』の送付を受け、爾後三十五年六月まで、同誌に俳句、新体詩、また当時美文と称された一種の散文、および紀行文、日記、隨筆を投書している。俳句は、はじめ石井露月の選をうけ、紅緑、虚子の共選を一度、後は内藤鳴雪の選をうけた。『文庫』投書時代は「大塚甲山、山口吟風など俳人側にも紀行文は多かった。」（酔茗）といはれるように、俳人、紀行文家として目されていたものの如くである。「午後」（明31、11、「文庫」十一の一）は口語文で書かれたものであるが、

「愛すべき小品なるかな、描く所真に一幅田家の絵。斯くの如くにして初めて活文と許すを得べし。」（白蓮）、「語は簡、文は短、而して詩味の多大、この篇の如きは稀なり」（鳥水）と評されている。「斗槐雜誌」（明32、2）は「終の一飾、前の『午後』に比べては稍や下れども又これ死文にあらず。」（白蓮）と評された。この中文で、「何が故に兄には父母を養ひ、家を相続すべき義務ありて弟にはなきか。これ甚だ不公平の事なり。兄も弟も同く父母の子なり。父母の愛は兄も弟も異なるべきの理なし。世間は何が故に兄にのみ酷にして弟には寛なるか。兄に家を相続し父母を養ふの義務あらば、弟にもあるべき筈なり。兄が父母の恩をうけたらば、弟も受く。然るに弟は米国に行くも仏国に行くも自由勝手にして、兄は一步他郷に出つれば、不幸者なりと目さる。兄が不幸ならば弟も不孝の筈なり。弟が自由ならば兄も自由の筈なり。然るに嚴酷なる社会は兄にのみ酷なり。ア、兄に生れしものは不幸なるかな。」と述べているのは、この頃既に青雲の志止みがたく、故郷を去って遊学したい気持を持っていたことを語るものであろう。家に縛りつけられている長男である彼は、この問題を解決したのであろう、明治三十二年、二十歳の八月十五日、沼崎郵便局通信事務の職を辞して、「西国立志篇」一冊を

懷に「便あらばまた我ありと思召せ我など死なめ業ならずして」の一首を残し、初度の出郷を決行した。文庫の誌友を頼って東海道を旅し、句集「征鞋集」、「歌集見し世の月」また「文庫」に投書の紀行文を得た。その一つ「嵐峽の秋」(三三・三「文庫」)なる一文は次のような評せられた。

「作者或は文に能ならむ、未だ妙域に入ること遙に遠きを免れず、総じて紀行文に初歩なる人は好みて抽象するにあり、たとへば紅葉を形容するにも好錦繡とか、乱彩霞とかいふ有り触れたる符牒を使ひて済ますことなり、いと易きことながら何等の印象をも与ふことなし。寧ろ如かんや嚙みて碎いて平たく之を布衍せんに。」(鳥水)「近来嵐峽を記するもの多きも、未だ甚だ感服すべきもの見ず、此文の如き亦「紀事論說文例」を離れて一歩ならざるもの、希くは大に力めて、更に成竹の作を示せ。(倚樓)

要するに、抽象的な形容がめだち、文がまだ独自のものになっていないと評せられたのであるが、「鳥羽の暮秋」(三三・六「文庫」)では「写真に向はれて觀察の一段と緻密になりたるを悦ぶ。」(鳥水)と評せられるようになった。また「桐秋日記」(三三、十一「文庫」なる日記文は、三十三年一月、帰郷後の秋を叙したものであるが、「秋は臍より立ちて鼻にいたる」本文を通じて唯一の警句、人をして笑倒百回、しかもヒリと聊かの辛味を鼻頭に覚えしむ。俳趣ある人にあらずんば能はず。この作者いかにして斯の如き秘技を蔵したるぞや」(鳥水)とか、「例によりて軽快なる文字、美文欄の異色とすべし、更に絶好の材料を捉えて所謂秘技の蘊奥を示し給へ。」(酔茗)など評せられて、努力の結果、進歩しつつあったことを知るのである。

一方、此時期の詩についてみると、甲山は明治三十一年春、文庫派風の詩を試作、夏に与謝野鉄幹の「東西南北」を得て日夕愛誦、その影響をば「以後の詩作は文庫派風の温醇な詩と鉄幹風の感慨激越の詩と相錯綜して判然其痕を見るべくいまだ融和するに至らなかつた」(「自伝材料」中「春夢」史)と自ら述べている。また「若菜集」

を読んでその影響を受けたが『文庫』に発表せられた詩は、拙劣で「八千草」（三一、十一）は、四行詩九篇であるが「輕妙とか飄逸とかの評言を与ふる程でもなし、これでは即興即吟も何の修鍊にもならず」（醉茗）或は「汝の作は拙し疵多しといはれて、腹立てざらん人は上達の望なし、但だ腹立ちて再び作らじ再び出さじと打捨てたるは女々しき業なり、むつの山人君は能く作り給へど多くは拙し、かく云ふ腹立ちたまはゞ尙能く作りたまへ。（醉茗、「散る銀杏」三二、二）と評せられるといった風であった。「つきかげ」（三二、六）一篇も藤村詩を形だけ模倣したものに過ぎなかった。ただ三十三年になると「輕快にして俳味あり、飄逸にして浮薄ならず、かゝる躰に雄拔の趣を求めんは野暮、求め得ざる一種の詩味は此篇に於て甫めて得む。」（醉茗「忘れ花」）と評せられたけれども、滝沢秋暁の模倣句を指摘せられるなど、要するに、文庫時代の詩は、まだ甲山独自のものをその詩境にも形式にも發揮するに至らず、俳味ある詩に僅かに特色を見出すに過ぎなかった。文庫派風の温和な詩風も甲山の本領を揮はしめるに適切ではなかったと思はれるし、少年時代から親しんだ漢詩、或は俳句の境地から脱して、詩の境地を把握するに至らなかったためと思はれる。このように、詩の方面では好評を得るに至らず、その結果自信を失って一時詩から離れて俳句に専念し、俳人たらんと志を固めるに至り、たゞ文庫誌において、詩、俳句、文章等に活躍したので、地方の文芸愛好家にはその名を知られることになり、三十四年に入ると、地方文芸誌に寄稿依頼せらるゝことが多くなった。『秋水』（愛知県西春日井郡金城村の堀甚之丞が編輯し、名古屋の「天声社」から明治三十三年十月創刊）が第一巻第五号で、若狭国早瀬本町の「明治文学会」から出ている同ような雑誌『明治文園』を合同吸収しているが、その第五号の裏面に「在文科大学、沼波瓊音君は本社々幹たるを承諾せられ、文学士久保天随君、高須梅溪君、小栗風葉君、生田葵山君、太田玉茗君、菱川淡水君、大塚甲山君、塩田緑葉君、奥村梅阜君、大塚香夢君、古田耕雲君、大沼鶴林君、北村香骨君の諸君は本社の主旨を諒とし賛助員たるを快諾せられ且時々寄稿の約あれば錦繡壯麗の文字

必ずや躍出せむ」という風に、甲山の名が見え、同号の「梅ちる集」には、俳句が掲載せられている。その他「みのむし」「木兎」(但馬豊岡町)『初霰』『破魔弓』(矢田挿雲主宰岩代福島町より刊行)などに寄稿している。そうして、『明治一萬句』^⑤にその作が収録されたり、沼波瓊音の『俳句の作法』(明治四十年十月刊)に、作例としてあげられたり、『名家百人十句』(明治四十三年刊)碧梧桐選の『続春夏秋冬』にも出されるなどして、やがて、鷗外の小説「羽鳥千尋」の中に「羽鳥と同じやうな手紙を己によこして、同じ役所の雇員になって、去年肺結核で死んだ大塚寿助と云ふ男がある。甲山と云ふ名で、俳句を作つて、多少人にも知られてゐた」(傍点筆者)と書かれているように当時、俳人として多少は認められるにいたつたのである。「歌、詩はともかくとして俳句には一番自信がある」という意味の言葉をもらしていたという。(令弟理吉氏談)歌、俳句・詩をその質の上から見た場合、この言は當っているように思われる。

さて、甲山は明治三十五年九月、二十三歳で再び上京した。文壇に登場せんとの若々しい野望に燃え立ち、文壇の有名人の誰でもいゝ自分の才を認めてくれる人を見出そうと、尾崎紅葉、坪内逍遙、森鷗外、与謝野鉄幹らを訪ね、或は書を呈している。東京での生活は三十六年一月から六月まで、動坂の精神窟(県南部出身者の共同生活したところ)に居たが、確たる職業はなく、貧困は常に彼の周囲につきまとい、鉄幹、鷗外から金を恵まれて僅かにものぐさ状態であつた。こうした状態である以上、文壇登場即ち経済生活安定の夢実現に必死とならざるを得なかつた。文筆でもって立つことは、たとえ才に恵まれたとしても容易でないことは云うまでもなく、甲山にしても、わずかに、鳴雪の好意によって、一茶、芭蕉、などの句を選じたものを内外出版協会から刊行した以外、俳句、詩でもって生活することは、当時としては極めて困難だったから当然のことであるが、自作のものを金にかえることには、全くその期待を裏切られたのであつた。三十七年正月には、遂に窮乏に耐えず、托鉢となつて相州下りなどするドン底生活にあえ

いだ。このように逆境に立たされた甲山は、極めて自然に、前年までの芸術至上の理念を、生活の実態に照合することによって否定し始め、懊惱、思惟の結果、社会の不合理、貧富の差を政治性の貧困に求めざるを得なくなり、文学者と政治家との価値設定を同一位相に求めることになった。三十七年四月十五日の社会主義協会への入会、幸徳秋水、西川光次郎、山口孤劍、樋口配天らとの接触は、すべてその間の事情を物語るものである。しかし又、鷗外と同じ様に崇拜した坪内逍遙への接近をも甲山は忘れなかった。四月十七日逍遙に示した甲山詩集は、思いがけなくも好評を得、逍遙より『新小説』主幹の後藤宙外へ推薦されるところとなり、七月から翌三十八年十二月までの一年有半、同誌にその詩と散文を掲載されることになった。『新小説』に発表された詩には、生活感情のこもった田園詩、宗教的感情のもった詩、就中、反戦詩が多い。散文は「帰郷の記」（三八、四）「ふるさと日記」（三八、六一八）「見聞と感想」の三篇で、当時好評を得たものであるが、彼の思想をうかがうに好適である。

甲山は、自己の貧困を一人のみならず、普遍的なものと認識し、その解決を広く政治革命にまで求めることに開眼したが、三十八年一月、その窮乏生活に堪えず、帰郷することになった。そしてその年十一月十一日、浦野館村書記に選任され、翌三十九年三月には上北郡役所の雇となり、庶務掛勤務を命ぜられ、七戸町に住んだ。この間、再三上京の希望を断たず、後藤宙外にその旨を訴えた。宙外はその都度自重を説き、出京後の経済的支柱の相談には乗らなかったことなどに対する反感も手伝って三十八年十一月に『光』同人山口孤劍に書信を送り、「新小説は我が十八ヶ月間の詩に対して一厘の報酬をも与えざるより随分後世の文学史家への絶好材料ではありませんか云々」と悲憤の情を口外したことから宙外と離れることになった。当時詩に稿料をきちんと払うことは珍らしいことであつたから、無名詩人であつた甲山に長期間、誌面を提供した宙外の好意は認めざるを得ないであらう。彼が、詩とその稿料のことで争つたことは、当時の書肆と詩人の関係、即ち、詩そのものが、出版人から如何に見られていたかを物語って

いる事柄である。ともあれ七戸での生活は、物的には安定していたが、このことはかえって詩精神のマンネリズム化退嬰化を促進せしめることになった。「人形の群の町ゆく春の風」の一句は、郷里の誰にも理解されず、味気ない日々を送った孤独な甲山の姿をとどめている。この孤独地獄からの救いを、甲山は恋を意識することによって得られたかに錯覚した。四人ばかりの女性の名がこの頃の詩の詞書に見られる甲山の詩として詩華集に収められた「塘の楊」は『新小説』（三十八、十一）に発表せられたものである。詩稿には「伸子を想ひ起して」の副題がある恋の歌である。歌と俳句の弟子として師事した千代子に抱いた慕情は最もはげしかったが、この千代子には約束された人があったため、成熟されなかった。孤独は倍加し、酒に逃れることになり、「寂寥と酒乱の態の日々」（『自伝材料』）と回想されるほどであった。四十三年一月、村医、小沢豪による神経衰弱症という診断は、その傷々しい苦惱の記録である。この間、三十八年退京してより、四十三年までの九六年間の長年月は、生涯、彼にとって取り返しの不可能な空白の時期であった。この空白の拡大をこれ以上進展せしめてはの意から、遂に六月職を辞して、十月初旬、「たちねの雲の秋霜また何時ぞ」の一句を残して、三度目の上京の途についたのである。しかし着京した甲山の眼には、過去六年間の社会の情勢変化は、あまりに顕著な様にのみ映じたのである。文壇も亦同様で、彼を置きざりにした。詩精神の在り方にも、詩の発想法にも六年前のそれは通用しなかった。彼は焦燥を感じ、且つ失望せざるを得なかった。「宇宙に我独なり年の暮」旧い友の念頭からは、彼の存在すら消え失せようとしていたのである。加えて、寒気せまる晩秋の東京に、貸布団にも手が出ない貧しさから、風邪気味となり、それが因で翌四十四年三月には遂に肺結核の症状を自覚したのである。けれども大逆事件を直視せざるを得ない思想と熱情は病苦をさほどに苦にさせなかったが、彼の病体は増々結核菌に虫ばまれ、越えて四月下旬、遂にまた／＼帰郷せざるを得なかった。かくて六月七日出生の地、浦野館村字上野において、不帰の客になった。三十一年の短い生涯であった。

甲山は近時社会主義の詩人として新しく取りあげられた。そしてその反戦詩あるいは厭戦詩が高く評価せられた。けれども彼の本質はやはり広い意味でのロマンチスト、ソシアリストではなく、ヒューマニストであつたといえよう。平野義太郎氏は、田中正造を「かれの無戦主義の斗争という立場は、社会主義思想に到達した反戦論というわけではなく、さりとて絶対的な平和主義というキリスト教による非戦主義でもなく、むしろ東洋の虐げられた人民の天道人道という実践的ヒューマニズムにもとづく力づよい、強靱な無戦主義のたたかいである。」と述べていられるが、秋水、尙江、鑑三らよりもむしろ甲山はこの田中正造に近いのではないかと思われる。甲山は秋水ら社会主義者とも交わつたが、或は内村鑑三の著書に親交もしたが、彼にそうさせたものは、父による感化とそれを深めた東洋思想にあつたと思われるのである。

『附記』

大塚甲山の反戦詩については先に紹介した「図書新聞」（昭和三十年十一月）で多少触れた。併せ御覧頂ければ幸いである。附載した年表は発表されたもののみによつて作成し、出来得る限り所載誌にあつたが、未見のものは甲山自筆の草稿によつた。「青春」「小琴」「尾道新聞」「福岡日々新聞」「秋水」「みのむし」「初霰」「破魔弓」「火鞭」などに発表されたのがそれである。未発表のものについても作成してあるが紙面の関係で省略した。七戸町の実弟理吉氏所持の資料の蒐集、整理、年表の整理にあつては教育学士風穴真悦君の協力を得た、記して謝する。

註

- ① 青森県史第七巻、明治九年四月十二日の塩谷参事の各区長あての指令。および、青森県農地改革史六三頁―四頁
- ② 上野小学校一覽表（大正十五年十一月三日作成）によると、同校は明治十一年九月十六日の創立で、歴任職員には、沼田義實、巡廻教師、就任月日空欄、大塚理兵衛、明治十一年九月就任、同十八年七月退任とある。学務委員は明治三十五年三月から三十九年まで。尙沼田義實に就いて甲山は漢籍の教授を受けた。
- ③ 桐秋日記 明治三十三年十一月三日「文庫」十六の一

- ④ 「文庫」の全貌（河井醉者「酔者詩話」）七〇頁
- ⑥ 今井柏浦編、明治三十八年六月、博文館発行。明治三十四年三月から三十八年四月までの日本派の俳人の作を集した載もの
- ⑥ 反戦思想の人々（青木書店昭和三十年二月刊）六九頁

作品年表

（蛇）は蛇蛻集第一巻、「たゞき合」は詩稿の巻名、（反戦詩）
（美）は美文集第二類、詩稿としたのは「蛇蛻集」のことである）

30											29					年発	
9	8	7	6	5	4	3	2	1	不明		12	12	10	9	7	月	
25											25		25		25	25	日表
小 文 庫	小 文 庫	小 文 庫	小 文 庫	小 年 俱 楽 部	小 年 俱 楽 部	小 年 俱 楽 部	小 文 庫	小 文 庫	小 文 庫	小 国 民	小 国 民	小 年 俱 楽 部	小 文 庫	小 文 庫	小 国 民	掲載誌(紙)	
三ノ一	二ノ五	二ノ四	二ノ三	九	二ノ二	七	一ノ六	一ノ五			八ノ十三	一ノ一	一ノ二	四	八ノ廿三	号巻数	
不明											イブリ					作 品 名	
沼の水結											法身禪師伝 偶感 老蠅を見る 二兵士の話						
小川原沼に於ける冬期の快樂																種 類 原稿	
天明飢饉の古記録																	
小野但正伝																備 考	
外看的美と内実的美																	
昔噺を記す																	
三尊仏余談																	
三尊仏余談																	
恐ろしかりし一夜																	
自筆年表による											「少年文苑」欄 「少年文苑」欄						

29				
12	12	10	9	7
25		25		
小 国 民	小 年 倶 楽 部	小 文 庫	小 文 庫	小 国 民
八ノ廿三	四	一ノ二	一ノ一	八ノ十三
二兵士の話	老蠅を見る	偶感	法身禪師伝	イブリ
「少年文苑」欄				
「少年文苑」欄				

「少年文苑」欄
「少年文苑」欄

自筆年表による

34	33													
1 1 // // // 不明	12 11 9 8 6 5 4 3										10 7 6 4			
	15 3 15 15 15 15 15											20		
み文 明 秋 秋 秋 秋	文 文 文 水 文 文 文 文 文 文										文 文 文 文			
の														
む														
し 庫 星 水 水 水 水	庫 庫 庫 葵 庫 庫 庫 庫 庫 庫										庫 庫 庫 庫			
十六ノ五	十六ノ三 十六ノ一 十五ノ五 單行本 十五ノ一 十四ノ六 十四ノ五 十四ノ三										十三ノ二	十二ノ一		
紅 刷 毛	忘れ草 桐秋日記 桑摘の初夏 鳥羽の暮秋 是吾郷 根河の秋風 嵐峽の秋										前出郷詞	閑余雜筆		
わが詩	朝顔と昼顔 忘れ花 土筆と菫 雀為蛤 暮秋 秋の山										つしかげ	善知鳥		
不明														
観紫眺黄														
狭布の時雨														
湘山の月														
羽衣の松														
浮寝鳥														
蝶														
新体混本歌五														
句	詩 6										文	詩 文		
蛇 (㊦)	美 (㊦) 美 (㊦) 美 (㊦)										蛇 (㊦)	蛇 (㊦)		
未見	「ことぶき」の号											原文「善知鳥物語」		
詩稿	本文ハアリ											「蛇蛻」に未収		
「冬の蝶に与ふ」	内外出版協会発行											「むつの人」の号		

36				35													
2	2	2	2			6	4	11	10	9	4	3	2	2	1	1	
20	5	1	1														
日	日	木	明	内外出版協会	文	文		新	文	文	初	み	み	文	青	東	
本	本							声					の	の		森	奥
人	人	兎	星		庫	庫		(羽後?)	庫	庫	霰	し	む	む	庫	新	日
一八一	一八〇	二の十二	卯の二		二〇ノ四	二〇ノ二			十八ノ四	十八ノ三				十六ノ六		報	
虎					八幡嶽紀行			名残の月				古の環	淡雪	百草譜残篇	新	新	
春花園凡兆が事					春三日			六月日記							年	年	
和泉式部と相模					一茶俳句集			巾輞俳人									
清風山房雜筆					俳句選(白)			俳句選(白)									
					元禄六家句集(単行)			逢坂									
					元禄十家句集(〃)			三保									
					芭蕉俳句集(〃)												
					明治新俳句集(〃)												
					俳句選(三)?(〃)												
文 詩					文			文	文				文				
					美(白)			美(白)	美(白)				美(白)				
					単行			草稿「若葉日記(中)」に同じ									
					単行			単行本									

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 7	〃 〃 6 6 6 6 不明 6	5 5 5 5	4	3 3
19 16 14 12 11 9 7 4 3 2	30 27 25 20 5	20 5		20 5
日	日 日 万 万 新	破 新 日 日	日	日 日
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 本 年 年 仏	魔 仏 本 本	本	本 本
本	本 人 草 草 教	弓 教 人 人	人	人 人
	〃 〃 一 六 四 八 九 ノ 六	三 四 一 一 ノ 五 八 八 七 六		一 一 八 八 三 二
漫遊漫録	漫遊漫録 俳諧瑣談(3)	春 俳諧瑣談(2) 現今の俳諧雑誌につき人に 答ふる書	俳句多作の弊害につき人に 答ふる書	俳句と抒情 「せせらぎ集」を読む
13 12 11 10 9 8 7 6 5 4	3 2 1	文 句 〃 文	文	〃 文
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	〃 〃 文 文 句 句	文 句 〃 文	文	〃 文
	未 見	未 見		

〃 不明	12 12	10	9 9	9	8 8 8 8 8	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 7
20			20 5	5	5 4 2 1	31 30 28 26 25 23 22 21
木 文 日 新	新	日 日	日	日 日 日 日 新		日
章 本 仏	仏	本 本	本	本 仏	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	
日 本 人 教	教	人 人	人	人 本 本 本 教		本
二〇一	四ノ十	一九五 一九四	一九四	一九二	四ノ八	
人事的句の尙白の補遺異聞	初 冬 不明 涙	近 詠	伴雲逐水 俳諧瑣談（5） 鉄 路 新 秋	伴雲逐水 人の情 漫遊漫録（22） 漫遊漫録（23） 漫遊漫録（24） 俳諧瑣談（4）	夏雜吟 漫遊漫録 漫遊漫録 漫遊漫録 漫遊漫録 漫遊漫録 漫遊漫録 漫遊漫録	漫遊漫録 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 21 20 19 18 17 16 15 14
文 句	句 12	詩 5 文 蛇 内	詩 3 文 蛇 内	〃 〃 〃 文 句 10	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 文	
〃 未 見						

9	8	々	々	8	々	7	7	7	7	6	3	3	1	
	1	21			4	17						1		
新 小 説	中 央 公 論	心 の 花	平 民 新 聞	新 仏 教 説	さ ぎ れ	尾 道 新 聞	明 売 新 聞	説 売 新 聞	新 仏 教	新 小 説	新 仏 教 誌	海 事 雑 論	中 央 公 論	新 仏 教
九の九	一八五	四十一	五の八	九の八		辰の七	日曜附録	五の七		九の七	五の六			五の一
南山北山雨 清水 明星 蝶に与ふ 小島の煙 露宮の暁色	野の草	乞食の夢	車夫	曙の風 老樹の詩	夏 百合	海 哀れ子猫	六月 濤とたたかふ人	今のは写しゑ 角田川辺の徜徉	毛錐七寸管 姨捨山 俳諧の現在 海の俳句	俳諧の現在	俳諧の現在	俳諧の現在	俳諧の現在	新年
詩12	々	々	詩		詩1	句15	詩	詩		詩4	詩	文	句12	
蛇(ぬ)					蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)	蛇(ぬ)
「たゞき合」の中	詞藻欄	長詩「落日老樹歌」 三七・七作	広島広陽新報に転載という		未見月日作品不明	三七・七作				三七・六作	「たゞき合」の中			

38					
4	3	2	1	々 12	
新	新	新	新	新 新	
小	小	小	仏	小 仏	
説	説	説	教	説 教	
十の四	十の三	十の二	六の一	九の十二	
古草新草 吹凡東京 夫の湾 雪嘆	若 我草 清水の 感水の 君の 米のと 里の 刈穂の 夏朝の 露国 窮巷の 隅田川 辺の初春	早梅集 江上月夜吟 花外寄少 胡桃拾ひ はたおり 婦郷の兵士 娼女の百 戦場の虹 農家の古 蝶と大の古	近詠抄	冬十五句 冬公の蝶 檜木笠？	
詩 11	詩 13	詩 10	歌 4	句 5 文	
蛇蛇蛇蛇 (ハ)(ハ)(ハ)(ハ)	蛇蛇蛇蛇 (ハ)(ハ)(ハ)(ハ)	(ハ)(ハ)(ハ)(ハ)		蛇蛇蛇蛇 (ハ)(ハ)(ハ)(ハ)	
「東京湾を蹴下して」の題 詩稿「吹雪の日軍人を想ふ」	「たゞき合」の中「露国」の二 字なし 三七・一・作	「たゞき合」の中「戦場の百合」 「たゞき合」の中 ソネット	短歌四首	三七・十一作 三七・十一作 中五句のみ 末見	

7	6	5	
新	新	新	新
小	小	小	小
説	説	説	説
十の七	十の六	十の五	
壺の石文 罪の葵 日向の野 陸奥の牧 嘆ある牧 友に訪は れて	北地春信 辛夷花 福寿草 再び四月 雨の日に ふるさと 日記	陸奥より 帰郷 野に出で 椰子の水 春の村 淡雪の雪 螢 ソネット 三首	東立鳥 陸奥の牧 越客と語 初巡礼の 初夏の林 蚕死せる 死せる鶯 鵲の記
詩9	詩5	詩6	文
蛇(土) 〃〃	蛇(土) 〃〃〃	蛇(土) 〃〃〃 蛇(土) 〃〃〃 蛇(土) 〃〃〃	蛇(土) 蛇(土) 蛇(土) 蛇(土)
「孤独の」字なし(詩稿) 原題「牧の児」		三月作 「たゞき合」の中	三七・七作 三七・五作 三七・一作

9	〃 〃 〃 〃 〃	8	〃 〃 7 〃 〃
			18 13 12 1
新 小 説	福岡 小 青 新 新 新 日々新聞 琴 春 説 教 教	新 小 説	青 小 毎 毎 毎 ハ 春 琴 日 日 ガ 聞 新 新 新 キ 聞 聞 聞 文 聞 聞 聞 学
十の九		十の八	二の十
曠野の聲 小景の聲 七疊月外	天野淡翠君に答ふ ソネット 五首 不明 ふるさと日記(続) 一日の旅 萍	寒潮の響 あわれ自由の朝潮よ むかし道 栗鼠 水信 ソネット 死せる鳥	五月三日晩望 春の来る方 風 ひぐらし 三つ葵 一一雲雀 二一帰省 三一萬葉 村の少女に 我子や何処 ソネット五首 帰省
詩 5	詩 2 文 詩 詩	詩 7	詩 3 詩
蛇(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇)	蛇(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇)	蛇(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇) 〃(蛇)	蛇(蛇)
	「一日の旅」の題 未見 未見 詩稿にあり 未見	「春林の栗鼠」の改題 ソネット四九番	原題「村里の少女」 〃 未見

11	〃 〃 〃 〃 10	10	9	〃 9
	10	10	16	10
新 小 説	尾 火 小 青 新 道 仏 新 教 聞 鞭 琴 春 教	新 小 説	東 青 奥 日 報 春	新 月 刊 ス ケ ッ チ 教 六 の 九
	(一 二 号)	十 の 十		
心の絵姿 女孤頭感慨 囚児慨	菊 鶏冠花 流のほとりに立ちて 虫の句 鹿の夢 按摩の少女 夏夜半の田園 丘の夏の望景 晩の風景 野果実 続寒潮の響		泉 彼天の使の図に題す 林檎ノルドが描ける 進め松明取り 七月の比 三色堇	
詩 16	詩 3 句 7	詩 13	句	詩 3
〃 蛇 (ハ)	蛇 (ハ)	蛇 (ハ)	〃 (ハ)	蛇 (ハ)
「たゞき合」の中	未 見 ソネット五・六・八番	「村の夏の日の煙 「六月の野景」にて 「六月の郊外」 未 見	未 見 十六日より	「たゞき合」の中

40													39												
〃 〃 1 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 1													〃 〃 〃 〃 12 〃 11 〃 10 8	1 〃 〃 〃											
30 29 27 2 〃 23 19 17 16 15 13 1													25 16 12 7 1 21 3 25 24 29	10 6 5 3											
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	東奥日報												光 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	東奥日報											
													火 〃 〃 〃												
													鞭												
													一の五												
〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	懸賞俳句発表 燃ゆる火の胸の琴 (一) (二) (三) (四) (五) (六)												〃 〃												

燃ゆる火の胸の琴（九）	歌	文	〃
〃	歌	文	〃
ローマ字に就て（一〇）	歌	文	〃
俳句略註（一一）	歌	文	〃
〃（一二）	歌	文	〃
〃（一三）	歌	文	〃
朽木書（一四）	詩	文	〃
〃（一五）	蛇	文	〃
〃（一六）	蛇	文	〃
永き日語り（一七）	文	文	〃
〃（一八）	文	文	〃
〃（一九）	文	文	〃
〃（二〇）	文	文	〃
〃（二一）	文	文	〃
〃（二二）	文	文	〃
〃（二三）	文	文	〃
〃（二四）	文	文	〃
〃（二五）	文	文	〃
〃（二六）	文	文	〃
〃（二七）	文	文	〃
〃（二八）	文	文	〃
〃（二九）	文	文	〃
東奥歌壇を設くるにつきて	文	文	〃
永き日語り（三〇）	文	文	〃
〃（三一）	文	文	〃
〃（三二）	文	文	〃
〃（三三）	文	文	〃
〃（三四）	文	文	〃
〃（三五）	文	文	〃
〃（三六）	文	文	〃
〃（三七）	文	文	〃
〃（三八）	文	文	〃
〃（三九）	文	文	〃
〃（四〇）	文	文	〃
〃（四一）	文	文	〃
〃（四二）	文	文	〃
〃（四三）	文	文	〃
〃（四四）	文	文	〃
〃（四五）	文	文	〃
〃（四六）	文	文	〃
〃（四七）	文	文	〃
〃（四八）	文	文	〃
〃（四九）	文	文	〃
〃（五〇）	文	文	〃
〃（五一）	文	文	〃
〃（五二）	文	文	〃
〃（五三）	文	文	〃
〃（五四）	文	文	〃
〃（五五）	文	文	〃
〃（五六）	文	文	〃
〃（五七）	文	文	〃
〃（五八）	文	文	〃
〃（五九）	文	文	〃
〃（六〇）	文	文	〃
〃（六一）	文	文	〃
〃（六二）	文	文	〃
〃（六三）	文	文	〃
〃（六四）	文	文	〃
〃（六五）	文	文	〃
〃（六六）	文	文	〃
〃（六七）	文	文	〃
〃（六八）	文	文	〃
〃（六九）	文	文	〃
〃（七〇）	文	文	〃
〃（七一）	文	文	〃
〃（七二）	文	文	〃
〃（七三）	文	文	〃
〃（七四）	文	文	〃
〃（七五）	文	文	〃
〃（七六）	文	文	〃
〃（七七）	文	文	〃
〃（七八）	文	文	〃
〃（七九）	文	文	〃
〃（八〇）	文	文	〃
〃（八一）	文	文	〃
〃（八二）	文	文	〃
〃（八三）	文	文	〃
〃（八四）	文	文	〃
〃（八五）	文	文	〃
〃（八六）	文	文	〃
〃（八七）	文	文	〃
〃（八八）	文	文	〃
〃（八九）	文	文	〃
〃（九〇）	文	文	〃
〃（九一）	文	文	〃
〃（九二）	文	文	〃
〃（九三）	文	文	〃
〃（九四）	文	文	〃
〃（九五）	文	文	〃
〃（九六）	文	文	〃
〃（九七）	文	文	〃
〃（九八）	文	文	〃
〃（九九）	文	文	〃
〃（一〇〇）	文	文	〃

[illegible]

43													42												
〃	7	〃	〃	〃	7	6	〃	5	4	〃	〃	2	不明	〃	〃	12	〃	11	〃	〃	〃	10	〃	7	
13	24	8	7	6	5	22	27	22	17	21	〃	1	8	20	6	22	8	25	2	7	6	19	12		
八戸新聞													東奥日報												
客窓偶語 初夏のころ 夏ころも 古きころも 〃 一棚の涼味 終りぬる恋の骸の歌 若草 春の残夢 俳句募集 一七日 手帖の隅から 錦海を弔ふ													青涙集 尋語録 己酉歳晚感懷 寒山落木 柏城雜詩 禁酒 〃 窮髮魔語 川村杜山を弔ふ 没落の表象 空なる努力												
歌 20 歌 11 歌 8 文 文 歌 20 歌 5 文													歌 20 歌 10 歌 20 文 文 文 文 文 文 歌 15 歌 20												
同十二月まで 未見 〃 〃 むつの山人 四時風草堂の筆名 題詠 評あり むつの山人の筆名 蠅螟堂主人の筆名 〃 むつの山人の筆名													短歌多数 腰弁当の筆名 臥泡上人の筆名 零丁庵の筆名 檣廼舎の筆名												